

史上最高に面白いファウスト

表題は文藝春秋新刊。「ゲーテ一筋 60 年、執念の独文学者が辿り着いた、革命的ファウスト像」の著者は、信州大時代にお世話になった中野和朗先生である。とにかく面白くて、一気に読み進んだ。

『ファウスト』は大学時代に読んだことがある。でも何も覚えていない。たぶん何回読んでも難解なので、途中で投げ出したと思う。本書帯裏に、あなたはなぜ名作『ファウスト』を読み通すことができないのか、その理由が 3 点書かれている。どの理由か定かでないが、とにかく展開がこみ入り難解だという記憶がかすかに残る。

カバー裏からゲーテが人生 60 年をかけた名作『ファウスト』。「努力し続ける教養人・学者ファウストの物語」ということになっている。しかし名作をひもとけば、欲望のままに少女を騙すわ、捨てるわ、殺人を犯すわ—ただのろくでなしと何が違うのか？ 実は、「努力の人ファウスト」のイメージは、誤訳にもとづく虚像だったのだ。御年 83 歳を迎える演劇好きのドイツ文学者が、楽しく解説しながら原作を一気に紹介。現代に通じる新しいファウスト像を提示する。

はじめに最後から一本書では、少しでも『ファウスト』本来の面白さが理解できるような翻訳を試みました。通俗派を自認する「ドイツ文学の料理人」として、箸が止まらなくなるようなご馳走に仕上げ提供したいのです。かなり大胆に包丁を振るい、独自の味の一品に仕上げましたが、必ずやみなさんのお口に合うものと確信します。一人でも多くの方に、あたかも「紙上演」を観るように本書を楽しんで頂ければ本望です。

これ以上「紹介」するより、本書を手にとってもらいたい。中野和朗先生は信州大で数少ない、若き「青春の思い」を理解してくれた先生だ。卒業を控えて、先生のご自宅にお邪魔したことがある。大学院に進学するか迷っていた頃だ。とにかく「前向き」に人生を歩んでいくこと、「チャレンジする」ことの大切さなど、先生らしく話された。先生の一言で、私の人生は決まったようなものだ。それと「第二外国語」はドイツ語を選択し、わずかな期間だったが、先生にも教えてもらったことがある。ドイツ語に興味を持つようになり、ゲーテなどもドイツ語の対訳で読むことにチャレンジした。これが大学院の入試に役立つことになる。苦難の連続だったが、先生なくして、いまの自分はなかったと思う。

こんなにお世話になった中野先生に、不義理をしてしまっている。先日、松本で本書の「出版記念会」があったが、残念ながら行けなかった。せめて本書をレポートで紹介して、お許しを請いたい。



(2016年12月2日)